
H a l l o w e e n P a r t y w i t h...?

ペロコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Halloween Party with...?

【著者名】

Z9536C

【作者名】 ペロロ

【あらすじ】

恒例となつた記念日小説。今回はハロウィン編です また新たな設定に挑戦していますが、皆様の反応が怖いというか気になるとうか……。まあ、書いて楽しかったんですけどね では、楽しんでいただけたら嬉しいです (*^-^*)

ピンポーンと家の呼び鈴が鳴る。

ドアを開ける音に続々、楽しげな声が響く。

「Trick or Treat?」

ドリキコロや魔女に変装して家々を回り、『お菓子をくれなきゃいたずらするぞ?』と言つて、子供たちがおやつをもらひお祭をハロウインと呼ぶ。

アメリカを中心とした祭なので、日本では、クリスマスのイベントほど盛り上がつとはいが、様々な店では、かぼちゃの飾りが売られていたり、某遊園地では、それ用のパレードが行われたりする。そして、そんな楽しいイベントを逃すはずのない小学生が米花町に住んでいる。

現在の時刻は夕方5時半。もう辺りは暗くなり、街頭が仄かに夜道を照らす。

月明かりは、少し曇つてゐるせいか、この地まで届かない。

「哀ちゃん、これ、どこに置く?」

「そうね……。じゃあ、あの台の上に置いてくれるかしら?」

「分かつたー!」

「おい、博士は?」

「着替え中よ。何か、かなり気合に入つてたみたいだけど」

「ハハ……自分が一番樂しんでんじゃねえか」

「ちょっと、元太くん! つまみ食いはダメですよー。」

「いいじゃねえか、ちょっとぐらー!」

「ダメなものはダメです!」

「チエツ……」

阿笠邸に響くにぎやかな声の主は、いつもの5人。

しかし、格好だけはいつもと違つ。

ハロウインパーティーということで、それ用の服装で集まつた。

黒い布をマントのよつこにして、ドラキュラに扮する男の子3人と紙で作った黒い帽子をかぶつて、魔女に扮する女の子2人。

テーブルの上には、かぼちゃの料理とジュースが置かれ、パーティーの準備はもうすぐ完成する。

「みんな、遅くなつたのう」

「じじで現れたのは、この家の持ち主の阿笠博士。

哀が着替えていると言つていたが……その格好はフランケンシュタ

インだらうか。

「は、博士……それ、何？」

こんな風に歩美が聞かずにはいられないよう屹、全へ似合つていな
い。

「何つて、フランケンシュタインじゃよ！ ジツジヤ？ 似合つと
るだろ？ 歩美ちゃんも哀くんも可愛い魔女さんじやの。おおー！
元太くんたちはドリーキュラか？ 似合つとる、似合つとる」

満足そうこうなずきながら言つ博士に

「そり……だね」

もはや何も言えなくなつた探偵団5人。

「ああ、パーティーの始まりじゃー！」

そんな空氣に気づかず、博士が嬉しそうに叫び

「待つてくださいー！」

光彦がストップをかけた。

「もう1人呼んでるんです。もつすぐ来ると思つたんですけど……」

「ん？ 誰じや？」

「みんな知ってる奴だよー！」

元太がそう答えたとき、ピンポンと家の呼び鈴が鳴った。

「歩美が出る！」

歩美が楽しそうに言って、ドアを開けていく。

ドアを開ける音に続き、楽しげな声が響く。

Trick or Treat?

「なつ！！」

コナン顔つきが鋭いものに変わる

- 今 の 声 -

...
[

歩美に連れられてやつてきた快斗は、この家にいる人間とは正反対の真っ白な服装だった。

それは、おのれの姿を洗浄する用意は出来ぬ。

「ああ。仮装にはもつてこいだろ?」「快斗さん、怪盗キッドですね!?

ニヤニヤ笑つて答えるその皿つきは、何かを企んでいるようなの
怪盗そのもの。

「兄ちゃん、似合うな！」

「うん、そうだよね」

「お、嬉しいねえ」

「コニコ微笑んでいるのを横から見る、実年齢は見た目よりずっと上の2人と老人は、顔を寄せ合ってひそひそと話していた。

「そりや、本物だしな」

「大胆ね、彼」

「そうじやのあ」

「どういうつもりだ、アイツ」

しかし、3人の心配は杞憂に済んだのか、パーティーはとても盛り上がった。

哀を中心に作ったかぼちゃ料理をみんなで食べ、その後は快斗のマジックショーが盛大に行われた。

快斗のマジックショーがフィナーレを迎えると大きな拍手と満開の笑顔でパーティーは終わり、みんなで分担して片付けをする。

翌日も学校があるからと、歩美・光彦・元太の3人は早めに博士に車で送つてもらうことにしてしまった。

哀やコナン、快斗の3人で残りを片付け終わつた時、哀が気を利かしたのか、地下室へと降りていった。

「さで」

「ナンが切り出す。

「何でオメエ、ここに来たんだよ?」

「ああ、探偵団の諸君に誘われてね。マジックも見たいってさ。オ

レ、祭とかそういうの好きだし

「あいつら、オレに何も言わねえで……」

「サプライズじゃねえ？」『言ひつな』って言われてたし。歩美ちゃんが『コナンくん、快斗お兄さんのことになると、顔が変わるの』

つて言つてたぜ？ オレ、そんなに嫌われてんの？」

「いちいち、マネすんなよ。というか、探偵が怪盗のこと好きになんてなるか！ ……にしても、何だよ、その格好」

「あはは、『レ？ いやあ、仮装パーティーだつて言ひし、ビリセ

ならつてね」

「まさか、オメハこの格好でここまで来たのか？」

「そうだけど？」

「……バカだな、お前。何、怪盗がのん気に夜道を歩いてんだよー。」

「別に、今日はハロウインだからで済むじゃねえか。仮装だぜ、か・

そ・う！」

「本物が何言つてんだよ……」

終始呆れ顔のコナンに、快斗は苦笑いを浮かべる。

「ま、いいじゃねえか」

「それにしても、違和感あるな。その格好にその口調

、そうコナンが告げると、スゥ……と辺りの空気が変ると同時に、タイミングよくキッドの背後の窓から雲の隙間に顔を出した月の明かりが室内に入り、夜の気配が漂う。

「……」

「オヤオヤ、名探偵は『私』の方がお好みでしたか？」

「バツ、バーロー！ その口調やめろー 寒氣する」

「連れないお方ですね……」

「連れてたまるかー！」

またしてもポンポン会話を交わしていると、時間が来たのか、キッドは

「さて、私はこれにて失礼しますよ、名探偵。今宵はお招きいただきありがとうございました」

POOM！ と、煙幕が張られ、コナンが咳き込む。

よつやく視界も晴れてきて咳き込むのが治まったときには、怪盗の姿は見当たらず、月明かりの差し込む窓が田の前にあるだけだった。

「ふう……」

小さく息をつき、ポケットに手を入れると、覚えの無い小さな丸いものが一つ入っていることに気がいた。

慌てて出してみれば、あの独特のニヤケ顔がプリントされた、一目で手作りと分かる飴玉。

「ふんつー。」

鼻を鳴らして口に入れると、ハロウイーンらしいかぼちゃの甘い味が口の中に広がり、

「…………うめえ」

探偵は一言呟いた。

それを、どこに仕掛けたのか盗聴器で聞いていた怪盗が、ニヤリと笑つたことを探偵は知らない。

(後書き)

初めての方も、いつも読んでくださる方も、じんにちは。ペロ口です。

お読みいただきありがとうございました。

さて、今回のお話は、例によつて記念日小説。ハロウイン編でした。

快斗にキッドの変装をさせて「仮装」と言わせたかったんです（笑）そして「C a l l i n g~」「待ってるから…」では青子ちゃんに正体がバレていましたが、今回は完全に探偵団とも知り合いで。コナンさんが何で怪盗の正体を知つているのかは……調べたのか怪盗がバラしたのかは知りません（爆）

こんなお話ですが、感想などいただけたら嬉しいです。

今回のこのお話に限り、指定していただいたら、そのキャラとして返事をさせていただきます。一人称の練習のためにも。もちろん、指定がなければペロ口として返事をさせていただきます。関西弁のペロ口とこう指定でも構いませんよ？（爆）

ではでは、これからもよろしくお願ひします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9536c/>

Halloween Party with...?

2010年10月9日07時20分発行